園だより５月

子供たち、主に結ばれている者として両親に従いなさい。それは正しいことです。
エフェソの信徒への手紙６章１節

何年ぶりかで桜の花吹雪を楽しんだ４月となりました。穏やかな春を感じる日差しの中、子どもたちはそれぞれに心と体を動かし心もちを表現しながら過ごした園生活のひと月でした。特に新しく幼稚園という社会に加わった子どもたちは、自分のペースで注意深く周りを眺め、確かめながら過ごす子、泣くことで精一杯気持ちを伝える子、あっちにこっちにと、とにかく色々な遊びを全身で感じている子、自分の居場所を見つけ黙々と過ごす子などなど、新年度ならではの子どもたちの心もちが感じられました。初めの頃はどの心もちにも心細さが加わっており、伝わってきました。けれども毎日変わらない幼稚園の生活リズムの中で過ごし、それぞれの想いに溢れた遊びを展開する進級児たちがつくり出す、穏やかな環境に混ざり合い過ごすとき、心細そうな心もちが安心へと移っていく様子が見て取れました。様子が分かってきたが故に心が揺れだす子どもたちもいます。倉橋惣藏先生（大正時代から昭和時代にかけての日本の教育者）も「子どもの心もちは、極めてかすかに、極めて短い。（中略）かすかにして短き心もちを見落とさない人だけが、子どもと倶にいる人である。（中略）その子の今の心もちにのみ、今のその子どもがある」（1932 年「幼児の教育」第 32 巻、第５号）と記されています。それぞれの子どもたちのそれぞれの心もち、どの心もちも尊いのです。「今のその子ども」たちとしっかり向き合いたいと願う私たち保育者は、登園してきて最初に心もちが表れる朝のご挨拶も「今日はどの様な心もちで幼稚園に来たかな」と楽しみに心を交わし、嬉しい一日の始まりにしたいと願っております。

新緑豊かな５月の日々も、子どもたちのかすかにして短き心もちを見落とさず、大切に過ごして参りたいと願います。保護者の皆様のご理解とご協力を宜しくお願い申し上げます。

園長　駿河　幸子